（C）日刊スポーツ新聞社

2014.7.23→2020.7.24

毎週水曜日連載
NIKKAN SPORTS SPECIAL

選手の胸に

伝統と革新の工芸品で　金属製の歴史を変える

「蛭谷和紙」唯一の継承者川原さん「挑戦したい」

富山県立山町400年の歴史

300回超大連載第80回

地味な制作

20周ほどの野生の猿が、雪解ける野山を駆け回る。そんな富山県立山町の一角に、蛭谷和紙の工場（こうば）はある。もともとは同県朝日町の蛭谷地区にあったが、先代の死により廃所を移した。高齢化が進む15世帯ほどの集落、川原（かわら）家は築100年近い古民家に移り住み、母屋の脇にあった倉を自分で工場に改造した。

ここに五輪を目指す、伝統と技術につながる書く技術を、地元企業などと開発してきた。

昨年3月に改修を終えた富山県民会館のロビー。富山の代名詞「立山連峰」を背景に、富士山、川原、家康、利家、秀吉、信長、義経、牛若丸、聖徳太子、卑弥呼、縄文人、ナウマンゾウ、ヒトの順に、高さ約7メートルの壁一面に、高さ約7メートルの柱には県木の立山杉を使った和紙を貼り、ともにガラスで覆った作品は圧倒的な存在感を放っている。

◆川原隆邦（かわはら・たかくに）1981年（昭56）5月31日、千葉県松戸市生まれ。00年に薬剤台高卒業。サッカー選手を目指し、北信越リーグのヴァリエンテ富山に入団。その後、京都のJFLチームを経て、サッカー選手を目指し、北信越リーグのヴァリエンテ富山に入団。その後、京都のJFLチームを受けるも入団はかなわず、02年に千葉に戻る。03年、両親が出身地の富山に戻ることをきっかけに、再び富山に移住。「長くできる仕事がしたい」と、既に60歳代の両親の職人芸家の妻釈永美さんと、長男吉吉さん（故人）に弟子入りし、唯一の継承者となる。11年、パリのジャパンEXPOに出展、12年イタリア・フィレンツェ市長に和紙の市章を献上。家族に和紙の市章を献上。家族の職人芸家の妻釈永美さんと、長男吉吉さん（故人）に弟子入りし、唯一の継承者となる。11年、パリのジャパンEXPOに出展、12年イタリア・フィレンツェ市長に和紙の市章を献上。家族の職人芸家の妻釈永美さん（39）、大郎くん（9）、水兄貫吉さん（故人）に弟

同月に開業した北陸新幹線のJR黒部宇奈月温泉駅や、新国立競技場の新計画に選ばれた建築家・隈研吾氏が設計し、同年9月にオープンした「TOYAMAキラリ」の内装も手掛け、可能性を広げていた。

新進気鋭は挑戦しては裏腹に「制作工程は地味だった。和紙の制作は冬場のみ。夏場にやるとコウゾを煮る水が腐る。冬は腐らない。日本の伝統工芸は元来、夏は地、冬に内職というサイクル。理にかなっているんです」。夏場は昼から開墾、畑でコウゾとトロロアオイを植え、秋に収穫、冬場は氷点下の日もある工場で、冷水を相手に楽しみながら和紙を作る。水を使う富山の川から引き、全て富山県内産の手作りだ。

発注元が大顧客であって建物の内装などに採用される作品を、地元企業などと開発してきた。

富山県民会館にある「立山連峰」と「立杉」（右）の作品

工場前で蛭谷和紙とガラスの試作品を手にする川原隆邦さん。後ろは64年東京五輪のエンブレムをすかしこんれた和紙（撮影・三須一紀）

NIKKAN SPORTS
東京オリンピック特集

64年東京五輪エンブレムのすかしを入れた蛭谷和紙

経済産業大臣指定品

◆蛭谷和紙　約400年前、現在の滋賀県東近江市蛭谷地区から、富山県朝日町に伝承したとされる。その地域も蛭谷と名付けられた。約70年前までは120軒ほどが蛭谷和紙を作っていたが大火事となりその後、米丘ふじさん1人だけが続けた。それから約20年後、ふじさんが病に倒れた後は夫貴吉さんが60歳ごろに継いだものの、80歳で引退。その後、03年に川原さんが継承者となった。88年に五箇山、八尾とともに越中和紙として経済産業大臣指定伝統的工芸品として認定されている。

隈研吾氏の建築とコラボした「TOYAMAキラリ」にある和紙壁面（左奥）

東京五輪表彰台

「挑戦したい」

育成に取り組む民間団体

ボランティア！あれこれ

公益財団法人・日本ケアフィット共育機構は、2014年からサービス介助士をボランティアとして育成しているスポーツの現場（配置）に広がった。資格を取得するための実技教習は今日開催。高齢者の疑似体験をしま、介助技術を身に付けたボランティアのニーズは高く、昨年はパラリンピック競技の五輪予選のほか、J1リーグ・東京のホームゲームなどに参加した。

高齢者の介助技術を身に付けて日常生活を送る、介助技術に加えて、高齢者や障がい者の使さや担を体験することで、介助の声掛けなどができるようになります」と高橋正毅インストラクター。2020年に向けてサービス介助士を増やし、その拠点となる「リレーション・ステーション・TASKAL」（大崎）を モデルとした各競のセンターHANEDA」を各地に設置することを目標にしている。「今、全国では10人いるサービス介助士を20年には20万人にしたい。そして、案出ていて、介助体験をしてもらえる。ポイントが高まる。小・中学校に取り組めれば、ボランティアの介助士が育成でき、ボランティアの介助士が育成でき、ボランティアの介助士が育成でき